

# 矢作川の流域における祭礼と服装に ついての調査（第4報）

三 河 万 歳  
西 尾 の て ん て こ ま つ り

枋原きみえ・齊藤一枝・坂倉園江  
菊山弘子・済木敦子・戸田光子  
菊地真理子・原 淑子

## Investigation on the Festival and Costume in the Basin of River Yahagi (Part 4)

by

K. TOCHIHARA, K. SAITO, S. SAKAKURA,  
H. KIKUYAMA, A. SAIKI, M. TODA,  
M. KIKUCHI and T. HARA

### 緒 言

本学生活科学研究所において、1963年から1965年まで矢作川流域住民の生活文化に関する総合学術調査を行ってきたが、そのなかの衣服部門を担当する私たちは、「まつりと衣裳」について発表した。さらに衣裳についての詳細は本学紀要第12号に第1報として、“稲武のまつり”（上流）“足助地方の夜念仏とあやど踊り”（中流）“猿投の棒の手”（中流）を、第2報では“瀧山寺の鬼まつり”（中流）を報告し、第13号には第3報として“西尾の大名行列”をそれぞれ報告した。

今回は第4報として“三河万歳”と“てんてこ祭り”について報告する。三河万歳については「まつりと衣裳」のなかで無形文化財の指定をうけた西尾の御殿万歳について報告したが、今回は尾張の知多万歳（無形文化財）と安城の別所万歳の概要と、その後の調査結果を加えて報告する。

### 調 査 方 法

三河万歳と西尾のてんてこまつりについては県史、郡誌、その他関係図書により地勢、風土、歴史について予備知識を得て現地へおもむき、市役所、祭礼関係者、古老などにより聞き取り調査を行ない、さらに祭礼当日は祭礼風景を写真におさめた。なお西尾の御殿万歳の衣裳については詳細な採寸を行ない、平面図を作製した。昭和41年12月に愛知県社会教育課が行なった三河万歳の撮影会（無形文化財保護推進のため文部省の特別助成をうけて西尾市役所に於いて行なわれたもの）に同席の許可を得て、万歳の演技をフィルムに収めた。（図1）

なお、三河万歳の起源を伝える「実相寺伝記」を調査のため実相寺（西尾市上町）を訪れ、18代森宗担老師（大正8年より実相寺の住職となる）より資料を得、教示を受けた。

### 起源および沿革

三河万歳とは三河地方一帯に存在した正月行事としての万歳をさす。御殿万歳、御座敷万歳ともいわれ、門付け万歳とは趣を異にし上品で風雅な中にこっけいさがあり、古典芸能の良さを継承している。現存しているものには、図1の西尾の御殿万歳（西尾市上町に伝わり昭和31年6月21日県無形文化財に指定される）、尾張の知多万歳（知多郡知多町に伝わり昭和32年1月12日県無形文化財に指定される）、安城の別所万歳（安城市別所村に伝わる）がある。

三河万歳の起源については開祖を大和朝末期の大江定基（文武天皇の御代の参河守）説と鎌倉時代の応通禅師（北条時宗の時代、実相寺の第二世）、無住国師（北条時宗の時代、長母寺の開山）説、あるいは戦国時代初期の玄海法師（足利義政の時代、熱田の薬師寺法師）などの諸説がある。

西尾の御殿万歳は大江定基説と応通禅師説、尾張の知多万歳は大江定基説と無住国師説、安城の別所万歳は大江定基説と玄海法師説がそれぞれ次の図書に記されている。（三河万歳の起源書、実相寺伝記、郷土文化、近世出かせぎの郷第8集尾張知多万歳、尾張名所図絵、三河制補松などによる）鎌倉時代の応通、無住説は記録も残りその信ぴょう性も確かであるが、大和朝末期の大江説は疑わしいと関係者間ではいわれている。

応通禅師と無住国師はともに聖一国師（東福寺および実相寺の開山）の弟子で（禅宗の極意をきわめたしるしとしての印可証明を受けたことが東福寺誌に記載されている）、応通禅師は兄弟子にあたる。応通禅師は当時宮中の公事にあかるく、無住国師は文章にすぐれ、多くの著書が残されている。実相寺の宗担老師の話によれば昔実相寺と長母寺はともに東福寺系で、両寺の交流は盛んに行なわれていたという。以上のことを総合し、文章にすぐれた無住国師が歌詞を作り（郷土文化）、応通禅師が宮中で行なわれていた正月行事の1つをとって万歳楽賦をつく



図1 西尾の御殿万歳（無形文化財）

り（実相寺伝記）、応通禪師をたよって宗より帰化した陣昭<sup>じんしょう</sup>、答谷<sup>とうごく</sup>に与え、生計のかてとなさしめたということである。なお記録には無住国師が万歳詞を作り与えた者として、有助説（尾張名所図絵）と徳若説（張州府志、諦忍の無住道跡考）の2説がある。徳若説のとくわかは「とくわかに御万歳」の万歳詞からきたものでことわ（永久の意）の言葉がなまり伝えられたのであって実在しない人物であろうと否定する説（郷土文化）もある。

三河万歳は鎌倉時代、および室町時代に盛んに行なわれたが江戸時代になると、徳川家代々この万歳をちょう愛し、武運長久を祈願するよう従侍させていたが、のちには隠密の役を与えるようになり苗字帯刀を許し、武家風の大紋の着用を許して特に優遇<sup>えんぐ</sup>を与えたために権勢をもつようになった。現にこれを証明するものとして永禄7年(1564年)子5月に徳川家康の与えた<sup>すみつき</sup>墨付が安城市別所に残されている。なお毎年元旦には吉祥の祝事として早朝千代田城開門の式があった。その式はまず門外から万歳宝印が「鍵いらす戸ざさるも御代の明けの春」と唱えろと衛士が「思わすのばす海老の錠」と呼応して開門し、年賀の諸代名は宝印の後に従って参殿し、祝詞を奉じ、万歳を謡い舞うのが常で、狂言中はいかなる行為もいかなる部屋への出入りをも許されていた。維新前にはおのおの一定の得意先があり、近くは西尾藩主を始め相当の家中・町家・在家に出入りし、遠くは江戸本丸を始め大名屋敷・関東諸国および信濃地方にまで広くその足跡を印したということである。しかし維新となり幕府の崩壊と共に、その加護は消滅したが、明治の政府による新しい認可を受け各自の得意先を回勤した。明治3年に発行された万歳認可証（図2）が西尾の坂部正一氏（昭和15年まで家業の万歳を受継いだ経験者の1人で現在西尾の御殿万歳の才蔵を演ずる人）宅に保存されている。なお得意先の名簿（図3）と

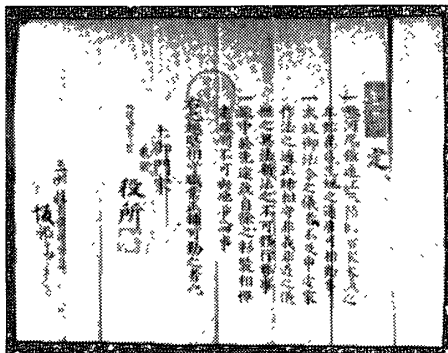


図2 西尾の御殿万歳認可証（明治3年）

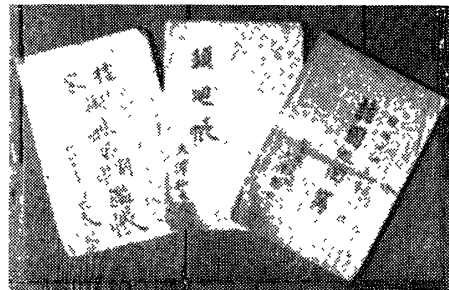


図3 西尾の御殿万歳得意先の名簿

して明治14年、明治19年のものが保存されている。この名簿にあるように大夫名によって縄ばりがきまっており、同一人物が得意先によって名をかえ、坂部満大夫としては茨木県、山沢清大夫は群馬県、大久保彦大夫は茨木県、鈴木福大夫は栃木県下野国、大沢仙大夫は栃木県那須郡というように各地を回勤した。上記の大夫名と回勤地は坂部正一氏のものである。なおこの名簿（得意先）は一種の縄ばりであるために相当の価値があり売買の対象になったということ

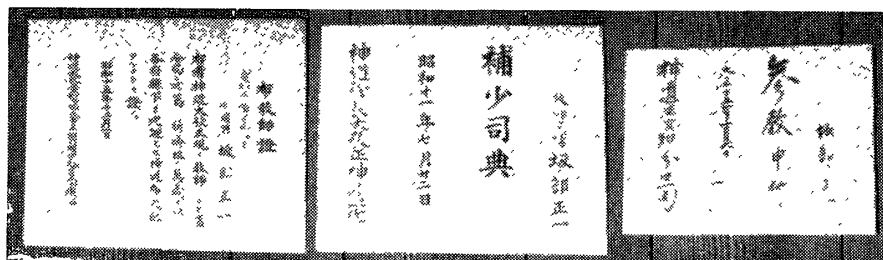


図4 西尾の御殿万歳布教師証書

である。天和の頃までは寺社奉行に管轄され貞享の頃からは京都土御門家の配下であったか、維新後は神道の管長より布教師の認定をうけて万歳に従事したという。図4はその認定証である。なお坂部正一氏が最後の回勤の際の昭和15年の神道御初穂日記（日記風の収入簿）に残されており、三河万歳保存の上から貴重な資料になると思われる。

### 舞いおよび衣裳<sup>いしょう</sup>

先ず神前に進み、<sup>こくほうしやう</sup>五穀豊穰一家繁栄を祈りその後主人公に、新年の祝詞をささげる。これから終ると万歳が始まりその舞は大夫と才蔵が交互に謡いつつ舞うもので 厳肅風雅な中にこっけいなやりとりがある。

太夫<sup>たゆう</sup>は世襲制であるか才蔵は、才蔵市（才蔵希望者が集って、その市が開かれる）の中から大夫がそれを選んだ。太夫は縄張り藩主の紋の付いた大紋を着用し、おもしろ、おかしく舞ったという。（保存会員坂部正一氏談）

西尾の御殿万歳保存会では、太夫の衣裳として大久保彦左衛門拝領のものと伝えられる緑色の麻の大紋（図5）の上衣と、加賀家拝領のものと伝えられる青い厚手絹の大紋（本学生活科学研究所発行、矢作川流域の文化、p. 62）が保存されている。前者の紋（図6イ）を日本紋章学によって調べたか、調査の範囲内では大久保彦左衛門の使用した紋については明らかにすることかできなかった。しかし

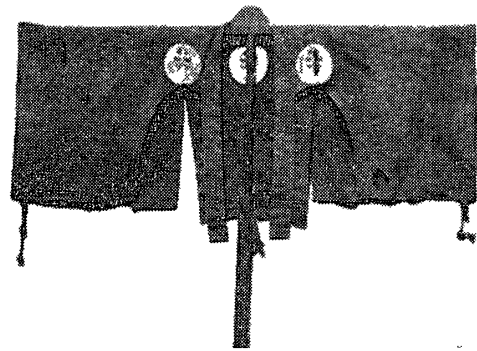
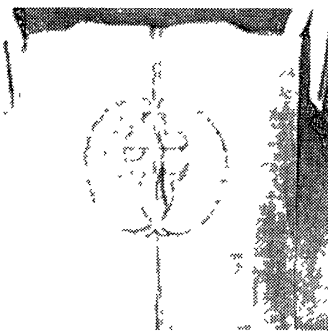
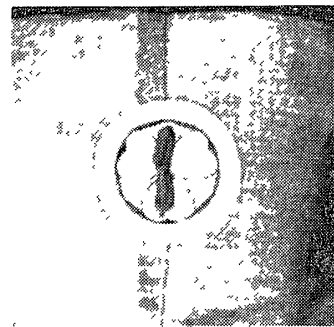


図5 西尾の御殿万歳，大夫の衣裳（大紋）  
（大久保家拝領のもの）

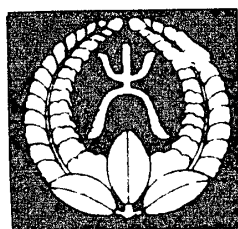


(イ) 拝領衣裳の紋  
（大久保彦左衛門拝領と伝える衣裳）

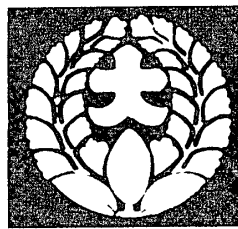


(ロ) 拝領衣裳の紋  
（加賀家拝領と伝える衣裳）

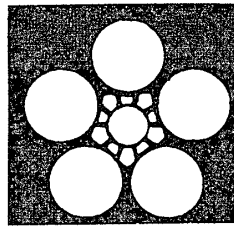
図 6



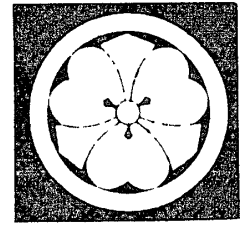
(イ) 上藤之内古文字  
の大文字



(ロ) 上藤の丸に大文字



(ハ) 剣 梅 鉢



(ニ) 剣 酢 漿 草

図 7

Technical drawing of a traditional Japanese garment, likely a kimono or haori, showing front and back views with detailed measurements in centimeters. The drawing includes a small detail of a collar or cuff.

**Front View (前):**

- Collar width: 47
- Collar depth: 19
- Collar height: 8
- Collar width (inner): 11
- Collar width (outer): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar height (outer): 12
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10

**Back View (後):**

- Collar width: 47
- Collar depth: 19
- Collar height: 8
- Collar width (inner): 11
- Collar width (outer): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar height (outer): 12
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10

**Detail:**

- Collar width: 47
- Collar depth: 19
- Collar height: 8
- Collar width (inner): 11
- Collar width (outer): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar height (outer): 12
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10

**Measurements:**

- Collar width: 47
- Collar depth: 19
- Collar height: 8
- Collar width (inner): 11
- Collar width (outer): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar height (outer): 12
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10
- Collar width (inner): 12
- Collar height (inner): 10
- Collar width (outer): 12
- Collar height (outer): 10

**Labels:**

- 前 (Front)
- 後 (Back)
- 前紐 (Front Knot)
- 後紐 (Back Knot)
- 裾 (Hem)
- 裾周り (Hem Circumference)

図8 西尾の御殿万歳 大夫の衣裳（大紋）

しかし、大久保家のものであることは明らかになった。また後者の紋（図6ロ）についても調べたところ、加賀家のものではなく（加賀家の紋は剣梅鉢（図7ハ）である）。西尾城主酒井家（永禄4年～天正18年）の「剣酢漿草」（図7ニ）であった。長い間いい伝える間に酒井家拝領のものか加賀家拝領と間違えられたのではなかろうか。拝領衣裳の上衣の前身頃か両者とも袴状にかき落され、ふりは孤状にくられた珍しい形状（図6・矢作川流域の文化 p. 62）である。このような形状は、日本服装史、有職故実書、能・舞楽衣裳の中にも見いたせなかった。下賜される時万歳衣裳として変形されたものではないかと思われる。

現在、使用の衣裳は文化財指定後テレビ出演に際し、新しく作られたもので、太夫は酒井家拝領の衣裳と思われるものの複製（図8）で青い紬の大紋をつけ、立烏帽子をかぶり、小刀<sup>たいもん</sup>を差し、中啓（扇の一種で両端に房か付いている）を持って祝詞入れを肩から掛けている。

才蔵の衣裳は“西尾町史”に記載されているものを参考にして作られた青い絹の直垂と朱色の七宝花菱模様の（錦織り）半袴（図9）をつけ、侍烏帽子をかぶって鼓を持つ。

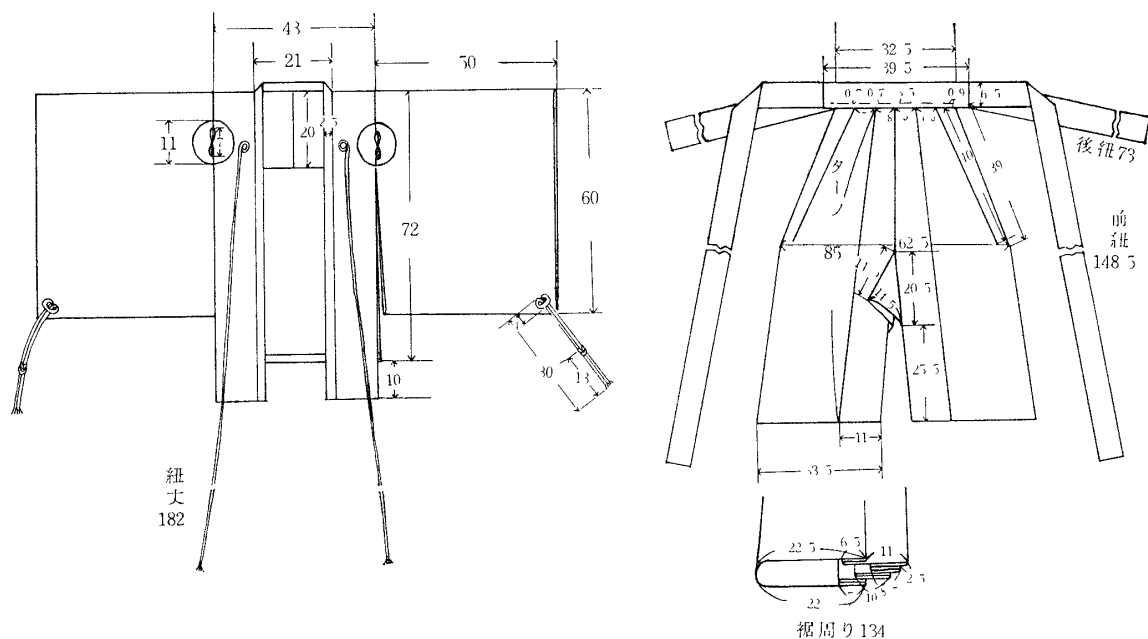


図9 西尾の御殿万歳、才蔵の衣裳

知多万歳の衣裳として太夫は小素襖<sup>こすあう</sup>に烏帽子をかぶり、扇を持ち、才蔵は小袖（主に黒）に裁付袴をはき大黒頭巾をかぶって、手には鼓を持つ。

別所万歳は太夫か1人で、才蔵は6人（内女性か1人）の7名編成で、これは七福神になそらえてのことという。太夫の衣裳は、昔は草木染の麻の素襖<sup>うち</sup>に打烏帽子であったといい、この衣裳は別所の区長宅に保存されているが、現在の太夫は狩衣に指貫<sup>かりきぬ さしぬき</sup>（当地の人は大黒袴ともいう）をはき烏帽子をかぶり、金・銀扇（日の丸印）を持つ、才蔵は直垂に裁付袴をはき鼓を持つ。（直垂は日の丸に鶴と若松の柄で、裁付袴は亀甲模様）

万歳衣裳については万歳保存地・時代・演者の好みにより変化したと思われ、その記録はさまざまである。その記録をわかりやすく関係図書発行時代順に並べてみた。（表1）

表中の衣裳についての説明を下に記しておく。

文献による		衣 裳						参 考 文 献
		大 夫			才 藤			
万歳名	区別	衣 服	かぶり物	持ち物	衣 服	かぶり物	持ち物	
三河万歳	昔 近年	素 襖 大 紋	折烏帽子 風折烏帽子					伊勢貞丈雑記 (1717~1784)
万 歳 三河万歳	昔	素 襖 素襖 <small>(麻布 くり袴)</small>	折烏帽子 〃					近 世 風 俗 志 (1904)
三河万歳		素 襖 (浅黄)	立烏帽子			大黒頭巾		民 族 芸 術 (1929)
御殿万歳	正装 略装	大 紋・長 袴 狩 衣・半 袴	風折烏帽子 〃		素 襖 羽 織 ・ 袴	侍烏帽子		西 尾 町 史 (1933)
三河万歳	昔 現在	大紋・素襖・袴 狩 衣	風折烏帽子 冠	扇 子 笏				郷 土 文 化 (三河万歳について) (1948)
御殿万歳		大 紋	風折烏帽子		素 襖			愛 知 県 指 定 文 化 財 図 録 (1966)
三河万歳 知多万歳		大 紋 直垂または素襖系	風折烏帽子 烏 帽 子					近世出かせきの郷 (1966)
知多万歳	現在	小 素 襖	烏 帽 子	金銀の扇 <small>(日の丸印)</small>	小袖(黒)に裁付袴	大黒頭巾	鼓	近世出かせきの郷 (1966)
御殿万歳	現在	大 紋・長 袴	立烏帽子	中 啓 小 刀	素 襖・半 袴	侍烏帽子	鼓	矢作川流域住民の 生活文化まつりと 衣裳 (1966)

表1 三河万歳の衣裳 (関係図書) 一覧表

直垂 直垂は上衣と下衣(袴)とからなり、上衣は垂領<sup>たれくび</sup>で初めは袖も細く短い袴の下に着た労働服で布製のものがあつたか、その起源は古く平安朝の頃から庶民や地方武士が用いた一種の內衣であつた。室町時代には武家の礼装となり正式には、烏帽子(折烏帽子で室町時代頃から風折烏帽子も用いられたか江戸時代には全く風折烏帽子になった)・直垂・大 帷<sup>おおかたひら</sup>・小袖・小刀・末広・鼻紙袋・緒太<sup>きくとし</sup>となつた。形態、地質が高級化した直垂は左右の襟に胸紐<sup>むねじ</sup>があり、袖には括り、または露をつけ、組紐の菊綴<sup>きくじ</sup>があるのか特徴で後世の典型となつた。その袴は上と共裂<sup>ともきれ</sup>で、きびすまでの袴であるか、後には長袴を用いて正式のものとした。地質には金襴<sup>らん</sup>、唐織物<sup>から</sup>、練絹<sup>ねん</sup>、生絹<sup>しや</sup>、紗、布などあつて、それぞれの階級に従つて用いられたのである。徳川時代には束帯<sup>そくたい</sup>、衣冠<sup>いかん</sup>を別として第1の礼装となり将軍以下諸大名4位の中將侍従以上を着用したのである。

大紋 直垂の一種で室町時代に直垂に家紋を大きくつけたものを大紋の直垂といい直垂より一段<sup>くらい</sup>位の下<sup>くだ</sup>の諸大夫が着用したか、これはもと下級の武士が主家の紋をつけたことに起つたものである。

紋は背、左右の袖の中央、前の袖の縫目<sup>ぬいめ</sup>におのおの1つずつ、袴の左右のあいびき(袴の両側のこと)の下に1つと前2つ、後の割<sup>くり</sup>の上に1つ、つごう10個を大きく白く抜染<sup>ぬきぞめ</sup>にしてある。

素襖 形は直垂とほとんど同して、地質は麻で、背および袖つけのところに家紋をつける。一名<sup>かわお</sup>「革緒の直垂」といわれる。これは胸紐<sup>むねじ</sup>や菊綴<sup>きくじ</sup>が皮でできているからで服装の格からいうと、直垂や大紋よりは一段低く、将軍御目見得以上の平士の式服であつた。素襖の下には、古くは、かけ萌黄<sup>もえぎ</sup>と草色、黒すん

だ緑色の小袖、夏は白帷子<sup>しろかたひら</sup>、若年のものは身替りなどのはてな小袖を着ることもあったが、江戸時代には袴<sup>かみしも</sup>と同じように熨斗目に限られた袴は長袴で、通常、上と同じ地質で、袴の腰紐は直垂、大紋が白であるのに対して、素襦は袴と同じく袴と共色である

衣と袴、つまり上と下の地質の異なるのを素襦袴と称した また素襦小袴と称して、上と異なった色で足首までの短い半袴をつけることもあった また素襦の一種で小素襦というのは袖幅が普通のものより少しせまく、これに半袴を着けた姿であった

素襦を着たときは頭には侍烏帽子をかぶり、腰に小刀と帯、蝙蝠<sup>かわほり</sup>と称する扇を持つのかたてまえてある。

狩衣<sup>かりぎぬ</sup> 平安時代以来の装束の一種、袷袢衣<sup>けつてきい</sup>の系統で衿は盤領<sup>あけくひ</sup>で袖と身頃が離れていて背後の上方か少し連結しているに過ぎない そして袖口には袖括<sup>そでくくり</sup>の紐があるのを特色とする 頭には烏帽子、袴は指貫<sup>さしぬき</sup>か用いられた

指貫 装束につける袴の一種で、裾口を緒でくくりしほるようになっているのが特徴である その起源は大和時代にさかのほるか、平安期には六位以上の人か用いるようになり直衣や狩衣に用いられた<sup>のうし</sup>

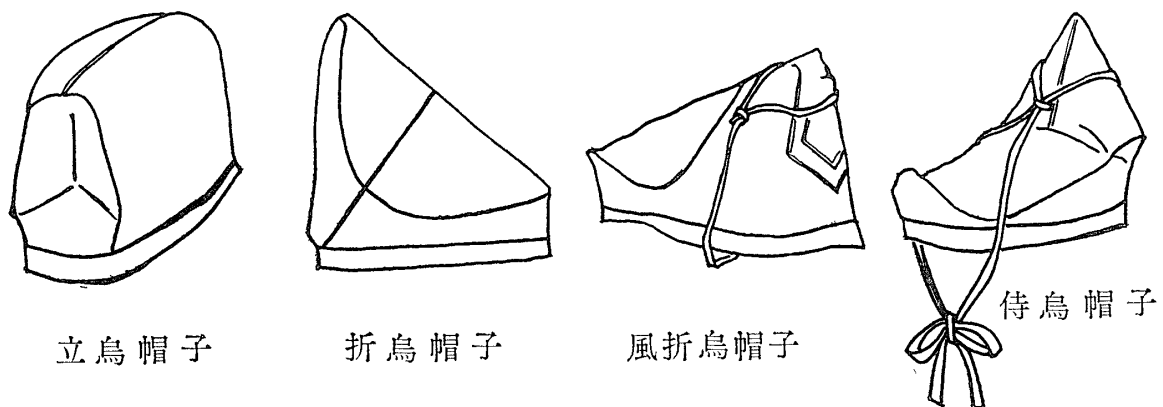


図 10 烏 帽 子

烏帽子（図10）日本における男子のかぶりものの一種で、早く奈良時代から着用され江戸時代に至った

起源としては、推古天皇のときに定められた冠制<sup>かんせい</sup>以来官吏は結髪して冠することになったか、この男子の結髪の風習が一般庶民に普及するに及んで、帽子をかぶる習慣もしたいに広まった

平安時代になると、上・中流者は常にかぶる一般庶民も外出時には帽を用いた 一方、直衣や狩衣かしたいに官服化してくるとそれぞれの形の烏帽子かてきてその種類も多様になった

立烏帽子 烏帽子本来の形で扁円筒状であるか、その形によって長烏帽子細烏帽子、などがある

かぶった時、前をちょっとへこましたのか一般的な立烏帽子の形として形式化し、室町以後はその部分に種々の名称かつき、その折り方によって着用者の身分を異にするようになった

折烏帽子 立烏帽子の上部かくすれ折れた形の形式化したものを称したか、このなかに風折烏帽子と侍烏帽子をも含めている。

風折烏帽子 烏帽子の峰か左右いすれかへ折れた形であり地下<sup>しち</sup>・諸大名らの主として着用するもので、武家では直垂、大紋、布衣に用いる

侍烏帽子 立烏帽子の峰の折れ方か特に複雑になった一定形式のものをいい、鎌倉時代以後武士か用いた折烏帽子の称であったか、狭義には前方に三角<sup>まねど</sup>の招<sup>まねど</sup>をつけ漆で堅く塗り固めたものをいった



## 結 び

万歳の起源は古く大和朝廷における正月儀式までさかのぼり、千秋万歳、千歳楽、万歳楽などと男踏歌の遺風と伝えられる。三河万歳もその1つて形を変え歌詞を変えて武家の時代に受け継かれ、武運長久、一家繁栄を祈る行事として行なわれた。三河は徳川氏発祥の地であるところから徳川300年にわたり幕府の加護を受け隆盛をきわめ、万歳といえはまず三河万歳かあけられる程となった。幕府の加護のもとに行なわれた万歳としてこっけいな中にも上品で風雅な芸能として育成され、明治となってもその遺風を重んじ、旧公家、名主などを回勤した。漸次その範囲を縮め昭和15年まで続けられたが昭和に入ると、一般民衆の中にも広まり、親しまれて行く、しかし第二次大戦のために一時中断されたが戦後、社会状況も整い、古くしかもよい遺風や行事を保存しようとする風潮が活発となり無形文化財の指定を受け現在に及んでいる。万歳の衣裳については、その時代演者の好みによって異なるが西尾、尾張、安城の各万歳はそれぞれ趣を異にし、それぞれ祖先の愛で育てた風雅な芸能のおもしろさを伝えている。これらの万歳かその資料と共に後世に伝承されることを望むものであるが多くの古文書が装ていもなく放置されているのは憂慮に耐えないものである。保存の上からなお一層の配慮を関係者各位に望みたい。

終りに本調査をするにあたり御協力下さった西尾市役所社会教育課の方々、保存会員坂部正一氏、実相寺森宗担老師に厚く感謝する。

## 西尾のてんてこ祭り

にいは  
熱池八幡社 愛知県西尾市熱池町  
祭 神 応神天皇  
祭 礼 日 1月3日（昭和35年まで旧暦1月3日）  
愛知県無形文化財指定 昭和32年1月12日

### 1. 由 来

西尾市の熱池町は第56代清和天皇の貞観元年に大嘗会の悠紀田に定められた土地で、これを記念してこの地に神殿が造営され、八幡大菩薩大明神と名付けられた。

その時神田（斎田）に奉仕した人々によって御田植祭が始められたという。八幡大菩薩大明神はその後八幡宮に変わり、更に八幡社に改称された。

このまつりには厄男として満25才の若者が6人選はれて奉仕する。

御田植祭をてんてこ祭りというのは、まつりの行事中に打ち鳴らす大鼓の「テテンテン、テンテコ、テンテン」の音により名づけられたものといわれている。

### 2. 祭 事 と 衣 裳

祭礼の当日は一同社守の家に集まって祭礼に用いられる衣装や調度品を整える。

大根と魚肉を鱈にしたものを作り（酢は橙酢を用いる）、これを舟型のような木製容器に入れる。

生魚の両身をそぎ、鱈を作った残骸をしめなわに吊して用意する。

昔は神社の西北隣接地にあった桜池の鯛という魚を毎年1月3日に伊勢両宮に奉献すると同時に八幡社へも供えたということであるが、現在ではほらなと海の魚を用いている。なお笹付の青竹2本を互い違いに並べて束ねたものを棒として神酒樽を前荷に、鱈を入れた器と

魚の残骸を後荷として吊るす。

他に青笹で竹ぼうきを作る。

昔は玉簀やぶと呼ばれた簀やぶがあり、神事に用いる竹はすべてその簀やぶから切り出したと伝えられている。

また大根をけすり男性の男根をまねてつくる。

なお、白米2升を炊き、飯たひつに入れ赤い風呂敷様の布で包む。

神社では神殿と鳥居の左側中間にわらを積み、焼いて灰にする。なお、昔は牛の舌をまねた楕円形の餅を神前に供えたという今は円形の餅を供える。

以上の準備が終ると社守の家から八幡社に向って行列が組まれるか、塩導（塩をまく人）は黒紋付に羽織、袴をつけて先頭に立ち、その後を社守は立烏帽子えはし かりきぬに狩衣、神官は冠に狩衣姿で続き、更に区長、氏子総代が紋付、羽織、袴姿で続く。その後から赤色木綿の単長着に赤い帯、赤い布で顔を包んだ厄男の奉仕員6人が続くか、その中で大鼓を打ち鳴らす者、飯ひつを持つ者、あるいは神酒樽や鰯のおけをつるした青竹をかつく者などの3人が、行進の途中で「テテン、テンテコ、テンテンテン」という大鼓の音に合わせて身ぶり面白く腰を振る。（図14）そのさまは素朴で郷土色豊かな、しかも珍奇な祭礼風景である。後には竹ぼうきを持った残り3人が続いて行進する。神社に着くと、神殿前で塩をまき、身を清め、神主のおはらいを受けたのち拝殿を降り、竹ぼうきを持っている者3人はわら灰のそばに控え、他の3人は鳥居の左柱とわら灰を中心にして、大鼓に合わせて左廻りに腰を振る所作をしなから3回半廻るか、終ると3人は再び拝殿に昇り、直ちに頬つつみを取り、男根と魚の残骸をつるしたしめなわを、拝殿の柱に結ひつける。他の3人はこれと同時に竹ぼうきでわら灰を四方にまき散らすか、これは肥料を施のりすさまをあらわしたものである。

再び拝殿で礼拝し、次に神職の祝詞のりとがかけられ、奉仕員が太鼓に合わせて扇を持ち、千秋万歳楽を唱えながら廻る。次に一同で田植謡うたを謡い、一曲終るごとに参拝者が鳥居の門松の葉をとって拝殿に投げ込む。これは早苗打ちをあらわすものと伝えられる。謡については昔は12か月について、12句あったといわれているか、記録は残されていない。今では4句伝わるのみという。謡が終ると奉持した神酒、飯、鰯をいたたき、祭りを終る。

## 考 察

昔の田植は農村にとっては、神聖な行事であったという。祭りの中で飯や鰯などをたづさえるのは田植時の昼食の意味をもつといわれ、昔は昼食というものはなく田植の時のみに限られ、また魚肉類は田植の時以外には食べなかったということ、これらのことからしてもいかに田植かはれかましい行事であり、神聖視されていたか推察される。また、腰に付ける男根を保存する家は落雷をよけることかてき、これを食べると夏の病にかからないといい伝えられ、希望するものが多いという。この男根を神聖視することについて中山太郎氏著“祭礼と風俗”新井恒易氏著“日本の祭と芸能”には次のようなことが述べられている。

古代人にとっては生殖の事実が神秘であり、全く神業としか考えられなかったのて性器崇拝が必然的に起り、その結果宇宙間の事象をことごとく交接によって生ずるものと考えようになり、穀物の生育、繁茂、結実の繰り返しも穀神の生殖作用によるものであるから、人間がその所作を演ずれば穀神に感染させることかてき、農作物の上にも同じ結果が得られると信じていたということ、そのことを感染呪術かまけわざといわれている。このような古代人の素朴な思想が西

尾のてんてこ祭りに影響して祭事の形式を作りあげたのではないかと考える。

また“熱池八幡社御田植神事由来”に記されている“古語拾遺”の中から1部をとりあげてみると、現代語で要約すれば、「蝗の害についての対策を占い師に聞いてみると、御歳神のたたきであるから白猪、白馬、白鶏を供えよと教えられる。御歳神に許しを請うと、答えていうのに麻柄（麻の幹）で持を作り（持にかけてかせを作り一方を切ってはたきを作る）、それで蝗をはらい、その葉をもって掃き去り、なお鳥の羽根をあおぎなさい。このようにしても蝗が去らなければ、牛の肉と男茎形（男根のこと）を形つくったものを溝口におけば御歳神の怒りが解けるであろうといわれ、教えの通りにすると、苗は元にかえって葉が茂り、穀物は豊かに実ったという」この“古語拾遺”の中に記されている伝説は、八幡社のてんてこ祭りにゆかりがあるように思われる。このてんてこ祭りに類似した祭礼については、小牧市久保一色の田県神社の豊年祭、犬山市楽田の大県神社の姫の宮豊年祭、東京都板橋区の諏訪神社、同区北野天神社の田遊や奈良県高市郡明日香村飛鳥座神社の御田植祭などがある。

次に本祭礼の衣装については特筆するものはないか、奉仕員が赤色の衣装を着用することについては、赤色を昔は神聖な色と考え、奉仕員が赤色の着物を着ることによって人間か神に姿を変えることを意味するといわれている。

以上てんてこ祭りについて述べたが、近代の祭りの中には交通機関の発達、大都市化の傾向と共に神につかえまつる、神をおかみまつる、神をなくさめまつる、という祭りの本義が失われ、余興が主体になったり、またPRに専念するあまり古くからの形態を失いつつあるものもあり、憂慮する識者も多いようである。

素朴に祭り本来の姿を伝えている西尾のてんてこ祭りは貴重な存在であり、今後も祭礼の伝承に対して十分な配慮がなされるよう市や町の祭礼関係者に切に希望する次第である。

最後に本調査をするにあたって御協力くださった西尾市役所関係者、熱池町青山六平氏に深く感謝する。

#### 参考文献および引用文献

- 1) 青山作平：(1936) 熱池八幡社御田植神事由来 pp 1~21
- 2) 新井恒易：(1956) 日本の祭と芸能 pp 151~152
- 3) 実相寺蔵書：実相寺伝記（抄録）
- 4) 橋本博：(1940) 改訂大武鑑、巻二
- 5) 林自見：(1775) 三河刪補松、全
- 6) 碧海郡教育会編：(1916) 碧海郡誌、pp 890
- 7) 伊勢貞丈：(1717~1784) 貞丈雑記
- 8) 今野圓輔：(1964) 季節のまつり、pp. 142
- 9) 喜田川季荘：(1908) 近世風俗志（原名守貞漫稿）
- 10) 郷土文化会編：(1948) 郷土文化、第3巻、第4巻、pp 3~5, pp 10~12
- 11) 郷土史編纂部：(1957) 尾張知多万歳
- 12) 中山太郎：(1927) 祭礼と風俗、pp 36~40
- 13) 西尾町役場編：(1934) 西尾町史
- 14) 沼田頼輔：(1926) 日本紋章学
- 15) 岡崎市役所編：(1930) 岡崎市史、第8巻、pp 228
- 16) 下中邦彦：(1962) 世界大百科事典、平凡社

- 17) 東京国立博物館編：(1965) 日本の服飾美術, pp 24~50
- 18) 名古屋女子大生活科学研究所編：(1966) 矢作川流域の文化, まつりと衣裳
- 19) 知多町教育委員会編：(1966) 近世出かせきの郷「知多文化財資料第8集尾張知多万才」
- 20) 鶴岡五郎, 日本名所図会刊行会編：(1919) 尾張名所図会, pp 126
- 21) 吉野竹次郎：(1964) 図解いろは標準紋張